

[Research Report]

Child care anxiety of mothers of infants in the nuclear family

— Effect of environmental factors upon child care anxiety —

Mari Ibuki*, Ayumi Nakamura*, Maki Nakano*, Eriko Muroya*, Masumi Kono*
Mariko Shibata*, Manabu Ashikaga** and Hiroshige Nakano**

* Aino Gakuin College

** Aino University

Abstract

We investigated the effect of social and home environmental factors upon child care anxiety of 300 mothers who had infants aged 3 months, 1.5 years and 3 years in B region, Osaka. Depending upon the mother's experience of child care, their co-operators, age of infants and their life style, there were various problems in their child care. It is natural for mothers to experience some difficulty in raising their children, but the main focus of this discussion is the degree of these difficulties, child care environment and level of mental support of their co-operators.

It is necessary for proper child care for the mother and father to have a continuous relationship from pregnancy while taking into consideration social life and local environment. Therefore, public health nurses must strive to establish a facility where information and knowledge can be exchanged the mother's problems can be discussed, and not simply prepare and dispense the information.

Key words : nuclear family, child care anxiety, mental support

核家族における乳幼児期の母親の育児不安

—— 育児不安に影響する人的環境要因 ——

伊吹麻里*, 中村歩美*, 中野真希*
室谷絵理子*, 河野益美*, 柴田真理子*
足利学**, 中野博重**

【要旨】 A市B区における3ヶ月児, 1歳6ヶ月児, 3歳児の核家族世帯の母親300人を対象に, 人的環境面が育児不安にどのように影響しているかについて検討した。

母親の育児歴や育児の協力者の有無, 児の年齢などにより母親の抱える悩みは様々であった。育児を行うにあたり多少の悩みを持つこと自体は問題ではなく, 悩みの程度や育児環境, 協力者の有無, 協力者の精神的なサポートが得られるかどうかが大切である。それ故, 近年の社会情勢を加味し, 地域特性を捉えた上で母親だけでなく, 父親も含めた妊娠期からの継続した関わりが必要である。そのためには, 保健師は子育ての情報や知識の提供だけでなく, 育児者間の交流が図れる場や, いつでも悩みを打ち明けられる場の提供などの精神面のフォローが必要である。

キーワード: 核家族, 育児不安, 精神的サポート

はじめに

近年本邦における核家族世帯は増加傾向にあり, 一世帯あたりの平均世帯人員数は全国では2.67人, A市では2.22人である¹⁾。今回対象にしたB区の平均世帯人員数は2.19人であり, 全国やA市に比べると少ない。一方出生数についてみると全国では人口千人に対して9.3人, A市では9.2人²⁾であるが, B区では8.6人と少ない³⁾。

さらに一般社会情勢において女性の社会進出, 晩婚化, 子育てに費用がかかるなどの理由から本邦の少子化問題が深刻化してきている。特に私達が調査したB区では核家族世帯が増加し, さらに少子化問題が明らかになってきている。また, 住居環境面について検討すると, マンションブームを反映してB区は一戸建

て居住者よりはマンション居住者が多くなり, 近隣との交流が希薄になってきている。このような状況下においてB区の母子を取り巻く環境が徐々に変化したため, 母親の育児に関する不安が多くなり, この問題の解決にあたっては地域の保健師がかかわる役割が重要となってくる。

今回私たちは, 育児をする母親にとって, 人的環境面が育児不安に対しどのように影響しているのかについて, B区における核家族を対象に調査研究を実施し, 若干の結果が得られたので報告する。

I. 研究対象及び方法

1. 調査対象

平成15年度7月現在, B区における乳幼児健康診

* 藍野学院短期大学

** 藍野大学

査受診者で3ヶ月児健康診査受診者100名、1歳6ヶ月児健康診査受診者100名、3歳児健康診査受診者100名の無作為に各健康診査受診者の最新データ合計300名である。

2. 調査方法

各対象者の母子管理カード及び乳幼児健診問診票から抽出した。

3. 抽出内容

各乳幼児健康診査受診者の生年月日、月齢、出生順位、出生時体重、母親の年齢、児の世話(昼、夜)の状況、児の様子、児との接し方、子育ての協力者の有無、困っていることの有無とその内容の有無を抽出した。

4. 作業仮説

以下の仮説を立て検討した。

- 1) マンション居住者と一戸建て居住者では、マンション居住者ほど育児不安が多い。
- 2) 育児に対して協力者が得られると育児不安は軽減する。

5. 分析方法

育児不安については、乳幼児健診問診票の項目内の困っていることとその内容の分析をした。育児不安内容は記述された文脈をカテゴリ化し、内容分析を行った。KJ法にて精神面、身体面、しつけ、食事、家庭、環境、その他の7項目に分類し分析した。

II. 結 果

今回の研究でマンション住宅と一戸建てを比較すると、3ヶ月児ではマンション住宅91件、一戸建て9件、1歳6ヶ月児ではマンション住宅80件、一戸建て20件、3歳児ではマンション住宅76件、一戸建て24件であった。全体ではマンション住宅247件(82.3%)、一戸建て53件(17.7%)であった。マンション住宅と一戸建ての数の違いには大きな差があり、居住環境での育児不安の比較には至らなかった。この調査によりB区はマンション居住者が多く、マンション化が進んでいることも判明した。そこで、核家族において育児の協力者である人的環境面に視点を置き、育児不安について検討した。 χ^2 検定したが有意差なく、割合での比較をした。

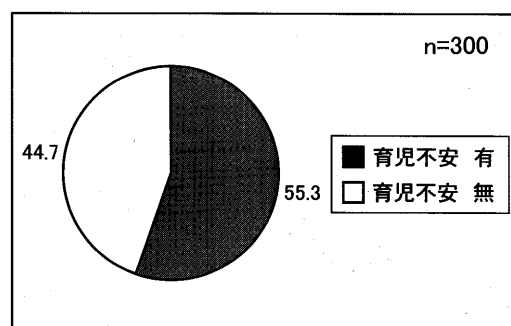


図1 育児不安の有無 (%)

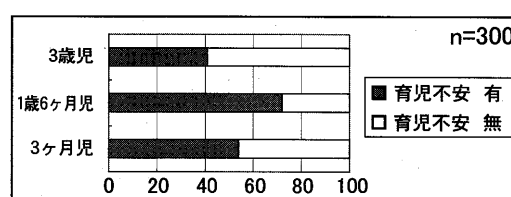


図2 発達段階と育児不安の有無 (%)

まず、対象全体で育児についての悩みの有無をみると、悩み有りが166人(55.3%)、無しが134人(44.7%)であった(図1)。

発達段階別で比較し育児不安の有無についてみると、3ヶ月児では悩み有りが54.0%、1歳6ヶ月児では72.0%、3歳児では41.0%であり、1歳6ヶ月児において育児不安を訴える母親が多かった(図2)。

次に、育児に対する協力者(父、祖父母、保育所、その他)の有無と育児不安の有無との関連性について分析した。また、昼間と夜間で協力者の有無に違いがみられたので(協力者有り：昼間90人[30%]、夜間154人[51.3%] 協力者無し：昼間210人[70%]、夜間140人[48.7%])時間的な環境からも分析をした。

協力有りで育児不安のある母親は昼間では15.0%、夜間では29.3%であった。協力有りで育児不安のない母親は、昼間では15.0%、夜間では22.0%であった。協力無しで育児不安のある母親は昼間では40.3%、夜間では26.7%であった。協力無しで育児不安無しの母親は昼間では29.7%、夜間では22.0%であった(図3、4)。特に、昼間に協力者が無く育児不安を持っている母親が多いことがわかった。

全体(3ヶ月児、1歳6ヶ月児、3歳児の母親各100名ずつ)では、協力者有りで、育児不安を持つ母親は22.2%、育児不安を持たない母親は18.5%であった(図5)。

全体を通してみると、協力者が有るといふ母親は全

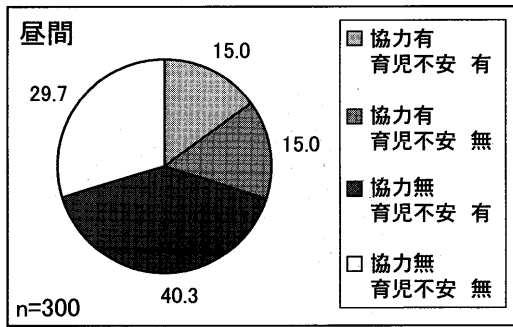


図3 協力者の有無と育児不安の有無 (%)

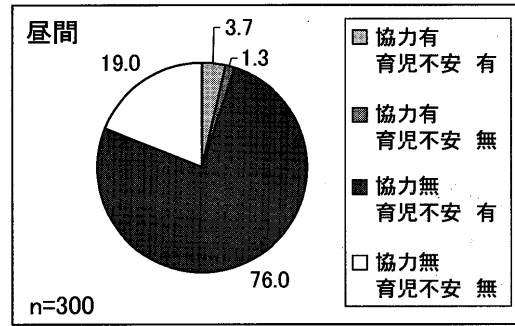


図6 父親の協力の有無と育児不安の有無 (%)

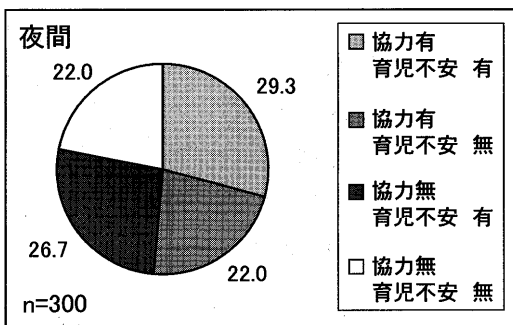


図4 協力者の有無と育児不安の有無 (%)

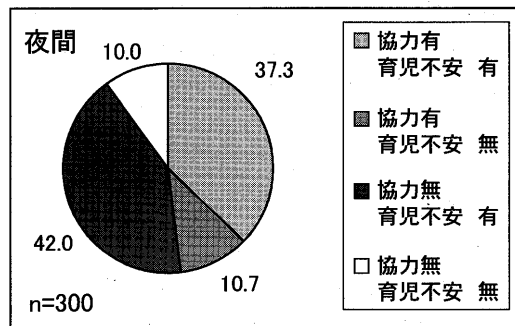


図7 父親の協力の有無と育児不安の有無 (%)

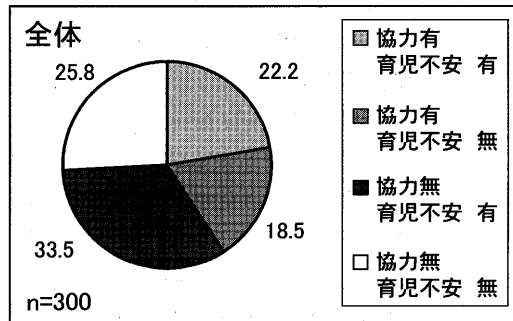


図5 協力者の有無と育児不安の有無 (%)

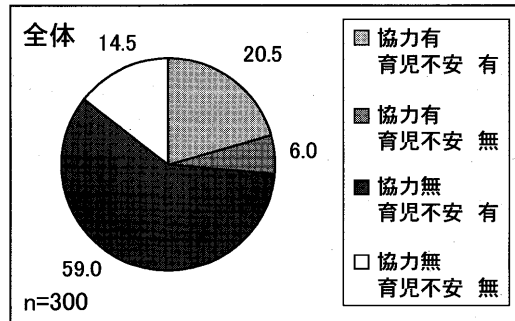


図8 父親の協力の有無と育児不安の有無 (%)

体の40.7%で、協力者が無い母親より少なく、母親に育児を任せきりである状態の家庭が多いことがわかった。そして協力無しで育児不安があるという母親は全体で最も多く、協力者が無い母親は育児不安を持ちやすいことがわかった。

父親の協力の有無と母親の育児不安の有無を比較すると、昼間では父親の協力が有り、育児不安を持つ母親は3.7%、父親の協力が無く育児不安がある母親は76.0%であった(図6)。夜間では父親の協力が有り育児不安を持つ母親は37.3%、父親の協力が無く育児不安がある母親は42.0%であった(図7)。昼間に父親の協力が有る母親は全体の5.0%と少なく、夜間で

は48.0%と増加する。父親の協力無しで育児不安の有る母親は昼間では76.0%、夜間では42.0%であった(図6、7)。

全体としては、父親の協力が有り育児不安を持つ母親は20.5%、父親の協力が有り育児不安が無い母親は6.0%であった(図8)。また、父親の協力が有るという家庭は半数に届かず協力が得られていない母親が多く占めていることがわかった。

出生順位別での母親の育児不安の有無について比較すると、第1子では育児不安を持った母親が58.9%、第2子では57.3%、第3子では33.3%であった(図9)。

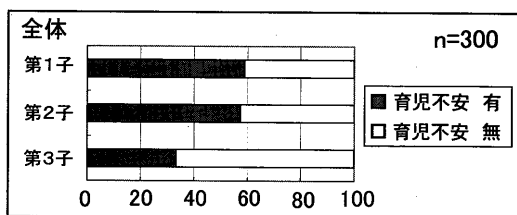


図9 育児歴と育児不安の有無 (%)

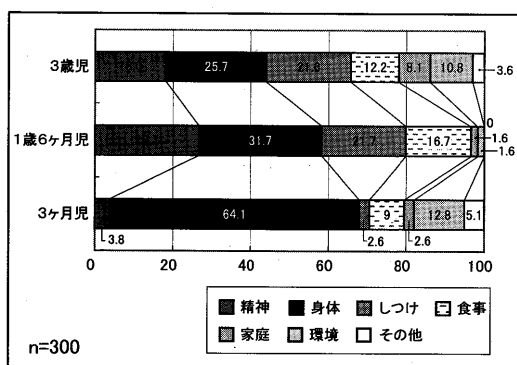


図10 育児不安の内訳 (全体) (%)

育児不安の内訳について見てみると、3ヶ月児では身体面64.1%、環境面12.8%、食事9.0%、その他5.1%、精神面3.8%、家庭・しつけ2.6%であった。1歳6ヶ月児では身体面31.7%、精神面26.7%、しつけ21.7%、食事16.7%、家庭・環境1.6%であった。3歳児では身体面25.7%、しつけ21.6%、精神面18.0%、食事12.2%、環境10.8%、家庭8.1%、その他3.6%であった(図10)。

Ⅲ. 考 察

横田⁴⁾は育児不安の原因として、「近年は両親や兄弟、近所の知り合いなど、周囲にサポートしてくれる人たちが少なく、またそのような人たちと付き合いのが下手な母親が増えたことも大きな要因である。」と述べている。本研究において、育児不安を抱えている母親は協力者の有無に関わらず全体では55.3%であり、発達段階別では3ヶ月児では54.0%、1歳6ヶ月児では72.0%、3歳児では41.0%であった。また協力者が有りという母親は全体の40.7%であり、協力者が無い母親より少ない。このことは母親に育児を任せきりである家庭が多いといえる。これは、湯沢⁵⁾の述べる親子関係の日本の特性の1つである「子どもの育て手(主たる監護者)が母親に片寄っていることで

ある。」が関係していると考えられる。またB区の地域特性として、マンション居住者が82.3%と一戸建て居住者に比較して非常に多く、さらに転入も24.7%と多い。平成13年度の出生率についてみると、全国では人口千人に対して9.3人、A市は9.2人であり、B区は8.6人と全国やA市に比べて低い。長坂⁶⁾は、育児不安と関連のある社会的背景として、「核家族化・近隣関係の希薄化・兄弟姉妹がいない・少子化が進んで周りに子どもがいない・生育の過程で子どもに接する機会がない(中略)それに加えて、住居環境の問題が加わり、集合住宅では『密室の育児』となり、母親は孤立し、不安が深刻化している。」と述べている。マンション居住や核家族世帯の増加は子育てを母親のみで行う機会を多くし、その結果母親の育児不安や負担を多くしている原因になっていると考えられる。

父親の協力の有無に視点を絞り母親の育児不安の有無について比較すると、父親の協力が無く育児不安の有る母親は昼間では76.0%、夜間では42.0%であった。これは夜間になると、父親が帰宅し育児に対し協力が得られなくても父親が存在するだけで精神的支えになり、このことが育児不安の減少につながったと考えられる。加我ら⁷⁾は「実際の育児参加が少ない割に母親から高い評価を受けている父親の共通点は、母親の育児を精神的に強く支えている点と、子どもを愛していることが母子に確実に伝わっている点であった。」と述べている。母親にとって父親が精神的支えとなるのが、母親の育児不安を軽減し、母親にとって育児をポジティブに考え、母子関係を円滑に保つことができると考えられる。それ故、育児に携わる際には多少の悩みを持つこと自体は問題ではなく、悩みの程度や育児環境、協力者の有無・その協力者の精神的支えが重要である。我々保健師は父親の育児参加が積極的に行えるように、また育児には母親の精神的支えが最も重要であることを理解してもらえるように助言していく必要がある。

次に、出生順位別の母親の育児不安を見ると、第1子が最も多く、第2子、第3子になるにつれて減少している。庄司ら⁸⁾は「第1子の場合では、母親にとって初めての経験になるので戸惑うことも多い。実際、電話相談や育児相談でも第1子の相談が多く現実的な不安で適切な助言によって速やかに解決することが期待される。そのため第2子・第3子では育児不安を訴えることは少ない。」と述べている。このことから、第1子は母親にとって身体や生理すべてが未知の世界であり、児の発達や個性を異常と感じやすく、不安を

助長させていることが考えられる。しかし、第2子、第3子となると第1子での経験があるため、児の身体的、精神的発達の経過がわかり、育児不安が軽減されているものと考えられる。

育児不安の内訳について見てみると、3ヶ月児・1歳6ヶ月児・3歳児とも身体面に対しての育児不安がもっとも多い。大日向⁹⁾は、育児相談の内容として「①身体の心配33.8%、②栄養・食事22.6%、③情緒・心理11.1%、④しつけ・教育7.8%、⑤生活環境5.8%」の順であり、本研究においても同様の結果であった。各年齢の育児不安の内訳については、3ヶ月児は、身体面に続き、環境面の不安が多い。この時期は身体発達が著名であり、個人差の大きい時期である。児は母親の養護無しでは発達せず、そのため母親は身体的なわずかな変化に対しても敏感に反応し、子育てをする環境に対しても敏感になりやすいといえる。そのため、身体面・環境面の不安が大きくなると考えられる。1歳6ヶ月児については、身体面に続き、精神面の不安が多い。この時期は身体面の発達と共に、言葉の確立や自我の発達が著しくなる。これらは個人差が大きく関与するため、母親が児の情緒的变化に対応できなくなり、児の精神面についての不安が大きくなることが考えられる。3歳児については、身体面に続きしつけに対しての不安が多い。この時期は、社会性の発達、知的能力の発達がめざましく、日常生活習慣の習得する時期である。日常生活習慣の習得にあたっては個人差が大きく、母親は自分の子どもに対して遅れているのではないかと悩む傾向が強いことが考えられる。

また、横田は育児不安の原因として、「母親の不安が世間の情報に起因しているものであることは珍しくない。」と述べており、情報時代といわれる今日では、育児書・育児雑誌・テレビ・ラジオ・新聞など様々なところで育児情報が氾濫している。そのため自分の求めている情報を選択することは容易でなく母親の育児不安を増強させる結果となっているといえる。それ故、私たち保健師はこれらの情報に対応できるようにアンテナを張り巡らし、母親一人一人の個別性を重視した育児に対するアドバイスをする必要があると考える。

以上のことより、本研究では仮説1)については立証できなかったが、仮説2)については、立証できた。

IV. ま と め

本研究より、以下のことが得られた。

1. 近年の社会情勢（核家族・離婚率・少子化）が母親の育児不安の原因の一つである。
2. 育児に対し、父親の精神的支えがあれば母親の育児不安は軽減する。
3. 第一子ほど育児不安が多い。
4. 発達段階が進むにつれ、身体面の不安は減少し、精神面の不安が増加する。

お わ り に

私たち保健師は地域特性や社会情勢に応じた関わり方が必要になってくる。母親の育児に対する不安は日常的で些細な内容であることが多いことを理解し、身体的、精神的な発達段階に伴い生じる育児不安を予測し、対処方法を提供していくことが必要であり、両親や家庭だけで解決できない問題については、常時個別に対応し、母親が子育てに不安やストレスを1人で抱え込まないように支援していくことが必要である。さらに、マタニティー教室や子育て教室などを通じて母親同士が交流を待ち、情報交換ができる場を提供し、父親を含めた育児が行っていきけるような支援が大切であると考える。

今後、私たちの取り組んでいく課題としてはマンション住宅における低層階と高層階の育児不安の有無や違い、母親の就業の有無と育児不安について明らかにする必要がある。以上のことを踏まえ、母親の育児不安の原因を明らかにし、母親の心理状態を理解した上で、母親個人・家庭・地域が求めている支援を常に考え活動していくことが私たち保健師の使命であると考える。

謝 辞

本研究にご協力頂きましたお母様方、ならびにA市B区保健福祉センターの保健師の皆様にご心からお礼と感謝を申し上げます。

引用文献

- 1) 総務省統計局：国勢調査報告 平成12年第2巻その1、日本統計協会、102-103頁、2001
- 2) 厚生労働省大臣官房統計情報部：人口動態統計 平成13年I巻、厚生統計協会、84頁、2003
- 3) 平成13年度B区業務概要
- 4) 横田俊一郎：育児不安と育児背景. 周産期医学(32) 増刊号：611-615、2002
- 5) 湯沢彦彦：親子関係の日本の特性. 周産期医学(32) 増刊号：673、2002

伊吹他：核家族における乳幼児期の母親の育児不安

- 6) 長坂典子：家庭という“密室”での育児. こころの科学 (103) : 50-56, 2002
- 7) 加我牧子, 渋井展子, 白井泰子：乳児期における父親の育児と母の評価, 平成8年度国立精神・神経センター精神保健研究所特別研究報告書. こころの健康についての国民意識に関する調査研究 —— 心の健康の指標とその評価に関する研究 —— : 23-39, 1997
- 8) 庄司順一, 谷口和加子：育児不安. 保健の科学 40 (4) : 289-292, 1998
- 9) 大日向雅美：育児に伴う母親の育児不安. 小児看護 12 (4) : 415-420, 1989